

6. 閉会挨拶

全国エリアマネジメントネットワーク会長 小林重敬氏

今回のシンポジウムに登場される渋谷のエリアマネジメントに関わる方々の顔ぶれを見ますと、今までのシンポジウムと違うものになるという予感がありましたが、その通りでした。最初にそれを感じさせたのは青木局長のお話で、そこから、このシンポジウムは違うという予感が始まり、その後、ふたつのセッションが続きました。私は、実は70年前にこの地域で遊んでいた子どもです。大和田小学校という、廃校になった小学校に通っており、先ほど、ひだという話がありましたが、その通りで、小学校が終わったあと坂を登ったら、とんでもないところに行ってしまうたり、ある時は渋谷川や八幡宮に行ったり、お神輿を見たり、そういうまちが渋谷のまちであったと思います。今日の話で、実は変わらないものは地形なのだと思います。人は変わる、まちは変わる、しかし地形は変わりません。私が通っていた小学校はいろいろな小学生が集まっていたが、いじめのない生活を送りました。そういうことを考えていくと、渋谷は地形の多様性からいろいろなことができる場所が用意されているかもしれないと思います。

十数年前に、三菱地所と大都市の居住の多様性の調査をしました。ロンドン、ベルリン、ニューヨークという大都市を調査したところ、面白い現象の一つとして必ず所得の低い人が住める場所があることが分かりました。大都市の中には夜まで働いて過ごさなければいけないが、そんなにお金を稼げない仕事を担う人がいて、その方々が中心に住む場所があります。今の時代には、そういう方々が新しいクリエイティブ性を発揮し、渋谷のまちの主役に躍り出るかもしれないと思います。東京の中の大都市で特徴ある渋谷として、私も70年前遊んでいたまちとして、そういうまちに展開することを期待して、今日のシンポジウムを企画くださった皆様にお礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。